

小田原及び近郊の旅 2020



2020年7月

旅のチカラ研究所 植木圭二

まだまだ新型コロナウイルス感染症による警戒ムードがある中、神奈川県西部の大磯、小田原、真鶴、湯河原を旅してきた。メンバーは船旅で知り合った友人たちで、ちょっと豪華な宿に泊まる歴史探訪の旅になった。

■高・近・短の旅へ

約1カ月前に行った奥多摩・秩父の旅と同様に、今回の旅もまたピースボートの船旅で知り合った鳩原（にゆうはら）さん、田中さん、竹田さんという人生の大先輩方と一緒に、私を含めた4人の年齢の合計は300才を超えており、再び300才カルテットの旅が始まる。

そして今回も最年少の私が車を運転している。

今回の旅のきっかけは、鳩原さんが「根府川にあるログハウスの宿を知っているか？」と私に聞いてきた。私は「行ったことはないけど知っていますよ」と答えると、すぐにそのログハウスに宿泊する旅行が決まった。

根府川は小田原市にあって神奈川県在住の私にとってはかなり近い場所になる。

そのために安い、近い、短い、といういわゆる「安・近・短」の旅になるかと思いきや、このログハウスの宿泊費は結構高い。しかし新型コロナウイルス感染症（以降コロナ）の対策で国から支給された10万円を使おうという機運や、近いから交通費が安く済むこともあって今回の旅は高級志向の名のもと「高・近・短」を旅のコンセプトにした。従って普段よりも高い宿や食事を体験し、今まで見過ごしていた近場の魅力を再発見するという旅を目指すことになった。

最近、高級宿で有名な星野リゾートの代表がマイクロツーリズムなるものを提唱している。

それはコロナの影響で日本に来る外国人旅行者いわゆるインバウンドがゼロになったので、国内の観光産業を回復させる方法として、国内旅行それも近場の旅行を提唱している。国内旅行においても都会から医療体制の脆弱な田舎への移動、人気の観光地の3密を回避する必要があるので、気軽に行ける近場の観光地を見直すことが「with コロナ時代」の旅行になると彼は言っている。

このマイクロツアーリズムはまさしく私たちの高・近・短の旅と同じで、むしろ私たちのアイデアを星野リゾートに持って行かれた感さえある。いや、それはちょっと言い過ぎか。

■湘南とはどこか

小田原の根府川へ行くために私たちは湘南から行くルートを選んだ。その湘南という地域は近年では実に有名になってきており、湘南がどんどん広がっているようにも感じられる。

湘南という言葉の響きやイメージが良いことから、どこもかしこも湘南を名乗り始めて、新築マンションの名前も〇〇〇〇湘南などとすると人気が出る。学校にしても昔は相模工業大学を名乗っていた大学が、今は湘南工科大学に名前を変えている。

その意味では長野県の軽井沢とよく似ているかもしれない。猫も杓子も軽井沢を名乗り、群馬県なのに北軽井沢と名乗った途端に別荘の販売が伸びた話は有名だ。

実は湘南という地名はなく、湘南が付く町や住所は存在しない。一時期は平塚市が湘南市を名乗ろうとしたが実現には至らなかった。

地名はないが、藤沢市にある神奈川県立の湘南高校は唯一“湘南”を名乗っている公立の学校だ。来年で100周年を迎え、偏差値も高い有名伝統校だ。石原慎太郎が卒業し、かつては高校野球では甲子園で優勝もしている。

従って湘南とは、湘南高校のある藤沢市を中心とした相模湾の沿岸だと思われる。つまり東は逗子や葉山くらいまで、西は大磯くらいまでが一般的には湘南と呼ばれている。だからなのか大磯と小田原を結ぶ有料道路は湘南の西で“西湘バイパス”という名称になっている。

ところが今回の旅の最初の訪問地の大磯の駅前には「湘南発祥の地 大磯」と書かれた石碑が建っており、私たち300オカルテットはその石碑の前で写真を撮っている。

この石碑のもとをたどると、湘南の始まりが見えてくる。

時は1664年（寛文4年）、小田原の外郎（ういろう）の子孫といわれる崇雪が、大磯の鳴立沢（しぎたつさわ）に石碑を建てたといわれている。その石碑の表面には「鳴立沢」、そして裏面には「崇雪 著盡湘南 清絶地」と刻まれている。これは「清らかで清々しくこの上もない所、湘南とはなんと素晴らしい所」という意味で、中国湖南省の景勝地の湘南に似ているともいわれている。この石碑には年号の記載がないが、寛文年間に建てられたと推定されている。そのために大磯は江戸時代の初めから湘南と呼ばれ、湘南発祥の地だという根拠になっている。

石碑は大磯駅から近い風情ある鳴立庵という俳諧道場にあったが、現在は大磯町郷土資料館に移設され、鳴立庵にはレプリカが設置されている。

そして300オカルテットが今見ている大磯駅前の石碑は観光PRのために近年建てたものだ。



<湘南発祥の地の石碑 大磯駅前>

その大磯町郷土記念館のある神奈川県立大磯城山公園に立ち寄る。城山公園は小高い山になっており、展望台まで登ると梅雨時でありながら雨の切れ間で今回の旅でこれから訪れる真鶴半島を見ることができる。

この公園は私たちが登った展望台のある旧三井別邸地区と道路を挟んで旧吉田茂邸地区に分かれており、せっかくなので旧吉田茂邸も訪れる。見事な日本庭園の中には大きな木造の吉田茂邸があるが、残念ながら 2009 年に焼失して復元したものなので、旧吉田茂邸は新しい。

海に見える高台には吉田茂の銅像が建っている。通常このようなところに建つ銅像は海を向いているものだが、ここでは海を横に東の方角を向いている。それは吉田茂がサンフランシスコ講和条約に調印した当時の総理大臣だからで、銅像はサンフランシスコを見ているという。これは明らかに意図的なもので案外故人の遺志かもしれない。



<東を向いている吉田茂の銅像 吉田茂記念館>

今回は立ち寄らなかったが、大磯には大隈重信や島崎藤村の家もあり近代日本の政治家や文化人が愛した街になっている。さすが湘南発祥の地を名乗るだけあって、景色だけでなく歴史・文化も豊富だ。それゆえこの街は歴史散策をすると1日がかかりになるが、今回は早々に切り上げた。

■北条氏の無念

小田原市街を見下ろす山の上にある「石垣山の一夜城跡」に行く。この城、いや今となってはこの山は戦国時代の終焉に小田原城に立て籠る北条氏攻略のために豊臣秀吉が一夜にして建てた城として有名なところだ。

小田原城は戦国時代では最強・最大の城といわれており、北条氏は小田原城の防御に絶対的な自信をもっており、城は絶対に落ちないと思っていた。何しろ外郭は9kmもあって、そこに北条方6万人が籠城していた。事実、城は落ちなかった。しかし降伏した。

秀吉も簡単に落ちないこの城の攻略のために 22 万人の大群で陸と海から包囲した。その本陣として小田原城を見下ろす笠懸山に石垣の城を築いた。そのために後世では石垣山と呼ばれるようになった。その山の頂上に山と一体を成す城を約 80 日間で造った。短期間で造ったにしてはしっかりとした石垣でできており、かなりの長期戦を見据えていたのに違いない。

80 日間で築城したが一晩で周囲の樹木を伐採して、一夜にして城が現れたので一夜城と呼ばれている。小田原城に籠城していた兵は一夜にして出来上がった城を見て、驚き、士気を失ったと言われている。

私たちはその石垣山一夜城跡を本丸跡や二の丸跡はもちろんのこと、あまり観光客が訪れない水を貯めた井戸曲輪跡など、ほとんどを見て回り、結局は石垣山の中腹を一周した。

その探索をする間に 300 オカルテットが話したことは、これだけ広範囲の樹木をチェーンソーもない時代に、しかも夜中に全てを伐採するのは無理だろうということになった。それを裏付ける事実として城は 6 月 26 日に完成し 7 月 5 日には北条氏は降伏している。日付は現在の太陽暦ではなく月の満ち欠けを基準とした旧暦の太陰暦なので 7 月 1 日は新月で、当然その前後の夜は月の明かりはほとんど望めない。

おそらく伐採には何日もかかったはずだ。いや、80 日間の築城の様子を北条方は最初から小田原城から見ていたのだろう。一夜で現れたというのは秀吉神話のためはかなり誇張した表現だと私は思う。つまりあれよあれよという間に城を築くという圧倒的な軍事力や資金力を見せつけられ、到底勝ち目がないと北条氏は諦めざるを得なくなり、無念の降伏に至ったのだろう。

もしも一夜にして登場したならば、誰でもそれはおかしいと思う。いわゆる張子の虎と思い、決して戦意は喪失しないはずだ。それゆえ最初から見ていて、標高 262m の石垣山は平地にある小田原城からは相当威圧的に見えたに違いない。



<石垣山より小田原市街を望む>



<井戸曲輪跡>

■なお美の思いと、なお美への思い

一夜城跡の駐車場の隣に「一夜城ヨロイツカファーム」という約 2000 坪の農園を併設したレストランがある。このヨロイツカファームはパテシエの鎧塚俊彦が 2011 年に開設したパティスリー&レストランで、とても人気がある。

私たちが訪れたのは日曜日とはいえ既に 2 時頃でランチタイムをだいぶ過ぎていてもレストランの入口はまだ行列になっていた。このコロナ禍で信じられない光景になっていた。

鳩原さんはこのレストランに強い思い出があるようでレストラン敷地の農園に率先して、それも速足で案内してくれた。そしてそこに建っている記念碑を紹介してくれた。

記念碑には 2015 年に亡くなった女優の川島なお美の直筆メッセージが書いてある。

鎧塚俊彦は、川島なお美の夫でこのような海の見える風光明媚な土地に農園併設のレストランを建てる

ことは彼女の夢でもあったようで、記念碑には「美しく生き生きしたファームガーデンは私の夢です その夢をかなえてください 今までありがとう なお美より」と書かれている。



＜川島なお美のメッセージが書かれた碑＞

鳩原さんに何故そんなに思い出があるかと聞くと、「川島なお美こそが、私が最も“女”を感じる女性だった」とポロリと言った。彼にとって川島なお美は特別な人だったらしい。それにしても御年 86 才になる鳩原さんには驚くばかりである。

■マゴ茶漬けはお預け

昼食のために小田原早川漁港の「おさかなセンター」に立ち寄った。このセンターでは、中にあるいくつかの鮮魚店で魚介類を買って、それを中央にある BBQ 会場で焼いて食べるというのが定番になっている。

ただ私はかつてゴルフの帰り道にここに立ち寄って BBQ ではなくセンターの中にある食堂でこの地域の名物の「マゴ茶漬け」という鯆の茶漬けを食べることが多く、そのシンプルな味がなかなか美味かった思い出があり今回も立ち寄った。

昔立ち寄った食堂に入り、マゴ茶漬けを注文したが、「それは昔ここにあった店のメニューですね」と言われた。それはオーナーが変わってメニューも変わったということだ。私は「今は、ここではマゴ茶漬けはやってないのですか？」と聞いたが、やっていないと言われて仕方なくマグロ丼を注文した。味はそれなりに美味かったが、期待していたものに出会えないのは心残りで残念だった。

■ログハウスに泊まる

さて第一日目の宿泊はお目当てのログハウスの宿で、正式名称は「離れのやど 星ヶ山」となっている。

このログハウスは根府川の山の斜面のミカン畑の中にあって、結構広い敷地に宿泊用の 9 棟の独立したログハウスと受付やレストランのある管理棟がある。この管理棟もちろんログハウスになっている。ちなみにログは丸太という意味なので、ログハウスをそのまま日本語訳すれば丸太小屋になる。



<私たちが泊まったログハウス>

受付で鍵をもらって私たちが宿泊するログハウスに行く。それはまさしく丸太小屋という雰囲気
気で周囲の自然に溶けこむように建っており、太い丸太を使っているので実に質実剛健な感じが
する。中に入ると重厚な造りで、木のぬくもりを感じて何となく安心感さえ覚える。実に本格的
な造りをしていることに驚いてしまう。

1階はリビングとキッチンがあり、簡単な料理もできそうだ。奥には洗面、トイレ、風呂、そ
して屋根付きの比較的大きなウッドデッキもある。

階段を登るとロフトになっており、8畳くらいの畳のスペースには既に布団が4組敷いてある。
4人で泊まるにはちょうど良い広さを感じられる。



<ウッドデッキ>



<ロフト>

ログハウス内の風呂は家庭用サイズなので、私たちは管理棟に併設された風呂に行く。男女別
の風呂が2つと貸し切り風呂が3つある。どの風呂も湯殿はログハウス風の半露天という感じで
お洒落な造りをしており、4人も入れればいっぱいになるサイズだ。この宿はやはりカップルか少
人数向けの施設なのだろう。

その中でも大きな石をくり抜いた風呂がこの宿の自慢の風呂で「飛龍の湯」と名前が付いている。湯船は長さ 5m×幅 3m×高さ 2m くらいの巨石をくり抜いて、その名前が示すように龍の彫刻が付いているから。そして龍の口からお湯が出るというよくあるスタイルの湯船に見えた。だから龍の彫刻は後から付けたと思ったが、よく見るとお湯の出口は龍の口ではなく別にあって、龍の彫刻と湯船とは継ぎ目がない。これはくり抜くと同時に龍を彫ったことを意味しており、さらに巨石全体を見ると龍の手足や胴体も彫ってある。つまり龍が巨石の風呂を抱えて飛び立とうとしているように見える。

ここまでやるかというのが素直な感想だ。人は予想していないことに遭遇すると驚き、そしてそれが素晴らしいものや納得できるものだと感動する。そして当然この風呂に入った。



<飛龍の湯 湯船>



<飛龍の湯 龍の彫刻>

さらに変わり種の風呂はツリーハウス風呂だろう。大きな木の上に設けた部屋をツリーハウスというが、湯殿がツリーハウスになっている。そこに木製の桶の風呂が置いてあるが、風呂は小さいので1~2名が定員だろう。女性客も多いから外から見えない代わりに外を見て入浴できないのは少し残念だが、ツリーハウスを湯殿にするとはその発想が面白い。

お湯は温泉だ。温泉成分表を見ると無色透明無臭、pHは8.2、湧出温度は56℃ということなので、温泉としても十分に堪能できる。



<ツリーハウスの風呂 エントランス>



<ツリーハウスの風呂 浴室>

■驚きと満足の夕食

夕食を食べるために管理棟の中にあるレストランに行く。もちろんこのレストランもログハウスで太い丸太でできていて、テーブルも椅子も重厚で格別の雰囲気を出しており、窓からは周囲の山の緑も楽しめる。これだけで料理一品くらいの価値がありそうだ。

最初に飲み物の注文を受けにきたスタッフは、ここの料理を和風創作料理だと紹介してくれた。その言葉どおりに最初に出てきたのは「自家製甘夏ミカンの海鮮サラダ」という珍しいものだ。もともとここはミカン畑なので今も各種ミカンを栽培しており、自家製の大きな甘夏ミカンをくり抜いて中に海鮮サラダを入れたという逸品だ。風呂もそうだが、この宿はくり抜くことが得意なのだろうかと思ってしまう。



<夕食の乾杯風景>



<自家製甘夏ミカンの海鮮サラダ>

刺身や煮物などが出てきて、最後に「やまゆりポークの揚げ物」というのがご飯と味噌汁と一緒に出てきた。普通は漬物などが出されるメのシーンだが、このタイミングに揚げ物とはなかなか面白い。

そのやまゆりポークの触感は鶏のモモ肉に似ているが、鶏肉よりはるかに柔らかい。こんなに柔らかい豚肉を私は食べたことがない。やまゆりを食べて育つと肉質が柔らかくなるのかと思っ、スタッフに聞くとこれが全く違った。

実はやまゆりポークとは神奈川県内の地域限定のブランド豚肉で、研究された飼料と飼育方法によって脂肪の質を高めた豚で、脂肪は白く赤身はやわらかい。神奈川県には約 60 戸の養豚農家があるが、そのうち 8 戸の養豚農家だけがやまゆりポークを生産でき、厳しい基準で選び抜かれた豚肉だけがやまゆりポークとして流通が許されているという。

神奈川県のような都市密着の養豚農家は普通に育てても競争力がなく消費者から見向きもされないで、こだわりを持って特色を出すことが世の中に認めてもらうための秘訣なのだろう。

料理の味や食材へのこだわりはもちろん、雰囲気や景色、スタッフの対応にも十分に満足できた夕食になった。

部屋に戻って、いつもどおりに夜の宴会が始まる。最初はログハウスの中で飲み始めたが、雨が降って気温が少し下がり蒸し暑さが清々しさ変わってきたので、ウッドデッキに場所を移して飲むことになった。もちろん屋根がついており雨の心配はない。川のせせらぎだけが聞こえ、山奥の夜を 300 オカルテットで独り占めしているようで実に快適だ。

いつものように 0 時過ぎには宴会が終わったが、4 時間ほどウッドデッキの飲み会は続いた。時間の経過を忘れさせるほどに話題もさることながら雰囲気抜群の飲み会になった。これは都会においては絶対に味わえない贅沢の極みというものだろう。

朝起きてログハウスの前を散歩する。管理棟の隣の道を少し下ったところに多数のミニカーのコレクションを展示しているログハウスがあり、その隣に 20m くらいに渡って線路が敷いてあって、一台の小さなトロッコ列車が置かれている。

実はこの列車は人が押す人車鉄道で、世界的にも珍しい鉄道が明治時代に小田原～熱海間を走っていた。当時の熱海には多くの政財界や文化人が訪れていたが、東京方面から熱海に向かうのに駕籠か人力車を利用されていた。そこで熱海の旅館が中心になって線路を敷いて、経費も安いことから人が押す鉄道を開通させた。豆相人車鉄道と呼ばれ、約 25km をそれまでは駕籠で 6 時間かかっていたところを 4 時間で運行した。一車両の定員 6 人、6 両編成で一日 6 往復したという。残念ながら関東大震災によって軌道が寸断されて廃線になったという貴重な鉄道だ。ここにある車両は当時のものを復元したものだが、何とも言えない気持ちにさせてくれる。

ミニカーもトロッコ列車もオーナーの趣味らしい。私は個性的な宿に行くことも多いが、どこもオーナーのこだわり、あるいは遊び心というものが味わいのある宿を作っている。

部屋に戻ろうと管理棟のレストランの厨房付近を通ると魚を焼くいい匂いが漂ってくる。これはきっと朝食は美味しい焼き魚が出てきそうだ。



<ミニカーハウスと人力トロッコ列車 列車の手前には線路が見える>

散歩を終えてレストランに行くと案の定、朝食には香ばしく焼いた鰯の干物が中心にあった。そして納豆や海苔、シラス、かまぼこ、玉子焼きなどの和の朝食の定番も添えられている。極めつけは味噌汁で具には蟹が入っており、この香りと味が料理全体を引き立ててくれる。

このログハウスは山の中にありながらも、実は海がすぐそばにあるということを主張しているかのような朝食だった。

チェックアウトになる。この宿はオーナーのこだわりが随所にあつて宿泊費はそれなりに高い。2人で泊ると2食付き一人2万円くらいになるが、私たちは2~4人用ログハウスに4人で泊まったので、それよりも多少は安く上がった。

支払った金額は決して高いと感じず、むしろ満足感や得をしたような気分になった。

■頼朝の初戦

旅の2日目は根府川の近くの源頼朝の挙兵に関連した旧跡を巡ることになっている。今回私は珍しく旅行前にその時代と、この付近の歴史を調べていた。

1180年4月27日、後白河法皇の皇子の以仁王が平家追討を命ずる令旨（りょうじ：皇太子や皇后などの命令文書）を諸国の源氏に発した。頼朝にも令旨が届けられたが頼朝は動かず静観していた。しかし平家が令旨を受けた諸国の源氏追討を企て、自身が危機の中にあることを悟った頼朝は挙兵を決意し、各豪族に呼びかけた。頼朝33才の時である。

最初の標的を伊豆国の山木兼隆として1180年8月17日に頼朝の命を受けて北条時政が伊豆の葦山で兼隆を討ち取った。ただしこの時の頼朝は戦に参戦していない。

伊豆を制圧した頼朝は相模国へ向かい、三浦を出発した三浦一族と合流するはずだったが、三浦一族は小田原の東を流れる酒匂川が大雨で増水し、足止めを食い合流できずに8月23日石橋山の合戦に突入した。頼朝方300騎は、平家方の大庭景親、伊東祐親らの3000騎と戦ったが敗れ、山中へ逃れた。数日間の逃亡の後に頼朝一行は真鶴から船で房総半島の安房国へ脱出した。

8月29日安房国へ上陸した頼朝は上総広常と千葉常胤に加勢を要請し、9月13日に安房国を出て千葉一族と合流、広常が大軍を率いて参上した。頼朝軍は10月2日武蔵国に入ると足立遠元、葛西清重が加わった。畠山重忠、河越重頼、江戸重長らも頼朝に従うことになり1180年10月6日鎌倉へ入った。1180年のほんの2カ月間で事態は大きく動いた。

それにしても源氏の血筋というのはこれほど凄いものなのかと改めて感心してしまう。

そして三浦、千葉、足立、葛西、河越、江戸などという豪族たちの名前が、現在の都市名や地域名になって残っているのは頼朝方に加勢した理由からだろう。

■頼朝は女に手が早い

その中において石橋山で頼朝を敗北させた伊東祐親は現在も伊東市として名前が残っている。祐親はその後の富士川の戦いで捕えられたが、周囲の嘆願によって許してもらった。それでも祐親は自害して果てた。伊東の名が残っているのは祐親や伊東一族が特別な存在だったからだ。

それはその10年以上前の1167年頼朝21才の時にあった。伊豆に流されていた頼朝は伊東祐親の監視下で暮らしていた。祐親が京都に一時的に赴任している間に頼朝が祐親の三女の八重姫と通じて千鶴丸が生まれた。京都から戻った祐親は激怒し千鶴丸を伊東に流れる松川に投げ捨て殺害し、八重姫を別の男に嫁がせた。その一方で祐親は頼朝を殺そうと企てたが、そのことを祐親の次男の祐清から聞いた頼朝は北条時政の家に逃げ込み一命を取り留めた。

祐親に命を狙われたがその次男の祐清に助けられたので嘆願が効いたのか、あるいは頼朝は自分のしたことに罪の意識があったのかもしれない。

そして北条時政の娘は政子で、後に頼朝の正室になる。実はこの結婚も時政は大反対している。

それはそうだろう当時は平家の天下で、誰もが平家にはにらまれたくはない。

そして伊東市街地を流れる松川の近くに頼朝と八重姫がデートを重ねた音無神社、八重姫が千鶴丸を供養したとされる最誓寺がある。

それにしても頼朝という男は世話になっている家の娘に手を出してばかりいる。余程女に手が早いのか、それとも男としても、人間としても魅力があったのか、いやどれもあったのだろう。単に血統だけでは頼朝のもとにあれだけの人が集まらなかったに違いない。

■石橋山古戦場はどこだ

根府川と早川の間の海岸線には石橋という地域があり、私はそこから内陸部に車を進ませる。

石橋山の古戦場跡は近くにあるはずだが、古戦場跡の標識を見かけ矢印の示す方向に向かうが、次の標識では別の場所を示していてなかなかここが古戦場跡だという場所が見つけれない。事前の調べでは佐奈田霊社の近くにあるはずだ。車を降りて今度は佐奈田霊社を目指した。うっそうとした木々に覆われ、苔の生えた古い階段を登って小高い山の上にとどり着くと神社がある。山奥にしては立派な神社で、由緒正しそうな感じがする。

運よく宮司がいたので古戦場の場所を聞くと、この付近一帯だと教えてくれた。同様な質問を多くの観光客から受けると言い、誰も狭い地域を想像して来るがかなり広い範囲だという。

宮司の話では、その広い古戦場の中でも佐奈田霊社がほぼ中心で、ここは石橋山の合戦で討死した頼朝方の先鋒を務めた佐奈田与一を祀っているという。

与一は 15 騎を率いて敵の猛将俣野五郎の 75 騎と戦い、最後は両雄の一騎打ちになり組み伏せて小刀を抜いて刺そうとしたが、血糊で小刀が抜けずに集まってきた敵に討たれたという逸話がある。その討たれた場所が境内の真ん中のこんもりした場所で、与一塚という石碑がある。

また与一には痰（たん）がからむ持病があつて、咳・声・喉に霊験があるとされて声を発する仕事の芸能関係者なども数多く参詣するという。



<佐奈田霊社の境内 手前に与一塚>

■ 霊社とは

それにしても佐奈田霊社の“霊社”という呼称は一体何なのか、官司に尋ねると意外な答えが返ってきた。それは神社と寺の両方だという。

かつて日本は各地の土着の信仰や神道があり、そこに仏教が広まり、地方ではこれらが一体になった神仏習合という信仰形式が 1000 年間くらい続いていた。ところが明治になって天皇を人格化し天皇制を強化するために明治政府は神仏分離令を出し神社と寺を無理やり分離させた。

しかしこの佐奈田霊社だけは、神仏分離を逃れて未だに神社と寺が一体になっている珍しい施設だと官司は言う。その意味では官司ではなく官司兼住職という呼び方が正しいかも知れない。その官司兼住職は神社と寺の両方が共存する実に不思議な施設だと、境内や本殿（本堂）の造りやしきたりを説明してくれた。

そしてなぜ神仏分離令から逃れられたかという、この霊社は頼朝が後鳥羽天皇の勅命によって建立したので、明治政府も天皇の勅命には手出しできずに神仏分離せずにそのままになったと官司兼住職は説明してくれた。

私にしても、そして 300 オカルテットのメンバーもこのような霊社なるものは初めて出会うものだ。さらに官司兼住職にも尋ねたが、神仏分離していない霊社なるものはここ以外では聞いたこともないという。

しかし分類上はやはり神社なのだろう。寺なら佐奈田与一を祀るのはおかしな話だ。

ちなみに英語の説明が書かれた看板を竹田さんが見つけて教えてくれた。そこにはこの霊社のことを **Shrine** と訳しており、**Temple** と訳していない。

確かに神社は **Shrine**、寺は **Temple** と訳す。そうすると新たな疑問が湧いてくる。

それは外国でも神社と寺があるのかという疑問だ。そもそも **Shrine** と **Temple** という英単語は日本の事情とは関係なく存在しているはずだ。

調べてみると **Shrine** は日本の神社を意味するものではなく、**Temple** も仏教の寺を意味するものではない。そのために日本の事情をよく知らない人にとっては **Shrine** や **Temple** からイメージするものは、日本の神社や寺ではないことになる。

ではその 2 つの英単語のそもそもの意味とは、**Shrine** とは特定の神や祖先、英雄、殉教者などを崇拝する神聖な場、つまり崇拝の対象が存在する場所である。一方で **Temple** は宗教や精神的な儀式や祈禱などを信者が集団で行う活動のための施設のことだという。

たまたま日本ではご神体を祀っているのが神社 **Shrine** で、修行をして信者が祈禱して護摩を焚くのが寺 **Temple** としただけのことだ。少し勉強になった。

■ 真鶴半島

石橋山の合戦で負けた頼朝は山中を敗走し隠れながら逃げている、現在の真鶴の漁港の前にある鷗窟（しとどのいわや）という洞窟に家臣含め 7 人で隠れたと言われている。海辺の断崖に小さな洞窟があるが、入口は施錠され中には入れない。覗き込むと意外に小さく狭い、奥行きもさほどない。看板の説明書きでは頼朝の時代には奥行きが 130m あったというが、波で削られて奥行き 11m になったと書かれている。わずか 800 年で波だけでそんなにも削られるのか。それはおそらく台風や津波、地震によって崩れたのだろう。

その洞窟から山一つ越えた現在の岩海水浴場に源頼朝船出の浜がある。ここから船を出して房総半島の先端の安房の国に逃れたといわれており、立派な石碑が建っている。

この辺りの場所は事前に調べていないと見学もできない。旅はある程度のテーマを持って来ると、全く違ってくるから面白い。



< 鷗窟 (しとどのいわや) >



< 源頼朝船出の浜 >

真鶴港のちょっと高台に貴船神社があったので参拝した。偶然に立ち寄ったが、300年以上も前から毎年行われる「貴船まつり」は国の重要無形民俗文化財に指定されており、日本三大船祭りの一つだと紹介展示がある。専用の船の上にご神体を神輿に乗せて、それを人力で漕ぐ別の船で引くという祭りだ。今年はコロナのために中止だというのが、この船祭りは是非一度見てみたい気持ちになった。

偶然訪れた神社で次の旅行プランが湧いてくるのも、近場の旅だからこそかもしれない。

真鶴半島の先端を目指して車を走らせると道路は見事な原生林に覆われている。原生林は樹齢数百年のクロマツを中心に巨木が生い茂る豊かな森で、江戸中期に小田原藩が15万本のクロマツを植えたことから始まった。ところどころに遊歩道が整備されており、この見事な光景を見て時間があればゆっくりと歩きたいという意見が車内から聞こえてきた。私も全く同感だ。

真鶴岬の先端から400mくらい先に三ツ石という岩がある。潮が引くと歩いて渡ることができるというのが残念ながら雨模様でもあり、完全に潮が引いてないので渡ることは断念した。

このような半島や海岸は日本国内を旅すると至る所にあるが、神奈川県内で都会のすぐ近くにあるのはありがたい。そして「また来よう」と思うことで高・近・短の旅の“近”の部分は達成されたかの気分になる。

■偶然と感動の昼食

真鶴漁港の魚市場の2階には町営の海鮮料理店「魚座 (さかなざ)」がある。ここでマグ茶漬けを食べようとしたが、定食になっておりボリュームたっぷりで魚のフライまで付いている。さすがに昨夜の夕食も今朝の朝食もたくさん食べており、今夜の夕食もきっとたくさん出てくるのでそんなに食べるわけにはいかない。

そもそもどうして茶漬けを定食にする必要があるのだろうか。簡単にササッと食べるから茶漬けなのに、意味が分からないと300オカルテットの誰かは文句を言っている。私も全く同感だ。

魚座の前に小さな食堂が長屋のように並んでいる。その長屋の真ん中あたりに「宵」という店があって、たまたまマゴ茶漬の看板が出ていた。ここでもマゴ茶漬定食（刺身付き）と書かれていたが、このような個人の店ならば交渉の余地があると思って、店主に刺身はいらないからマゴ茶漬単品にして値段を負けてくれと交渉すると即座に OK が出た。やはり何事も言うてみるものだ。

それにしても高・近・短の旅を目指すとか言いながら負けてくれとは、やはり私たちは根っからの貧乏人なのかもしれない。

出てきたマゴ茶漬は、実に美味い。期待以上の味だった。

鱈のタタキがふんだんに入っており、わさびがピリリと効いていて、やや茶色で濃い目の出し汁はいい味をしている。

これを食べるレンゲのスプーンが珍しい。プラスチックのレンゲだが、片側に櫛の歯のような切れ目が7本入っているという変わったものだ。店主に聞くと茶漬用のレンゲだという。私も他のメンバーも初めて見るもので、このレンゲのおかげで茶漬の汁を切ることができる優れたものだ。そしてこれはどうやら右利き用らしい、左手で持つと効能にあやからない。

このマゴ茶漬が税込み 500 円という格安の値段で、私も含め 300 オカルテットは大満足だ。



<マゴ茶漬とレンゲ>



<レンゲの歯>

私の持論で、感動とは予想や期待していたことと実際の体験との差（ギャップ）だと思っている。今回食べたマゴ茶漬は、所詮は茶漬なのでみんなはそんなに期待していなかった。私にしても昔食べたマゴ茶漬を想定していたが、味はそれを超えていた。つまり偶然遭遇したので感動は大きくなった。反対に過度の期待を持った場合には感動は小さくなり、期待が裏切られた場合には落胆することになる。

私はこれを「偶然と感動、期待と落胆」と呼んでいる。

一般的に、旅はこの両方を経験することになる。事前に調べて旅にでると期待するために落胆が多くなり、かといって事前に調べないと遭遇もしないかもしれない、そのバランスは難しい。

そしていつの間にか安くて良いものに感動する旅になっていることに気が付く。

■人間国宝美術館

真鶴の隣街の湯河原に行くと、珍しい美術館がある。それは「人間国宝美術館」、その名が示すとおりに人間国宝の芸術作品が展示されているらしい。建物は4階建てでそう大きくはない。鳩原さんが昔から気になっていた美術館というので早速入館した。

受付で「無料で案内を付けますが、いかがですか？」と聞かれ、これ幸いとお願ひすると、若い学芸員の青年が付いてくれて、この美術館は個人のコレクションを展示しているという。

最初は絵画の展示コーナーを案内されたが、私が「これも人間国宝の作品ですか？」と尋ねると、彼は「人間国宝は主に陶芸や彫刻などの芸術家になるので、絵画は文化勲章受章者などですね。ですから当美術館のメイン展示は陶芸になります」と答えてくれた。確かに人間国宝とは「重要無形文化財の保持者」だから、画家はそうではないということだ。

いよいよメインの展示で、陶芸を中心に人形・漆芸・金工等の名作が200点以上展示されている。ただしあまり人間国宝にこだわってはいないようで、和洋問わずジャンルを超えた名作の数々が展示されている。おそらく作品を集めたオーナーは人間国宝が作ったから購入したのではなく、作品で選んだ結果、人間国宝の作品が多かっただけだろう。

私はこの方面には造詣がないので「これはいくらくらいしますか？」と値段を聞くことがしばしばで、その答えは数百万円、あるいはものによっては数千万円などと教えてくれた。値段を聞いて驚くことはこれらが個人のコレクションということで、総額は数億から数十億になるだろう。庶民の私たちにはどれほどの金持ちなのか想像もつかない。

人間国宝ではないが元総理大臣の細川護熙は政治家を引退し、陶芸を志して湯河原に工房をもっているという。そのため細川護熙の作品展示コーナーもある。そしてその作品はそれなりの風格や気品が感じられる。さすがに先祖が熊本のお殿様で、元総理大臣だと感心する。

ざっと1時間半の鑑賞は有意義な時間を過ごせた。最後にカフェで人間国宝の作品で抹茶を飲ませてくれる。茶碗はいくつかの作品から選べるが、私が知っている作者の作品がなかったので細川護熙の作品で抹茶をいただいた。その茶碗でも40万円の値段が付いていた。人間国宝の作品ならば400万円だから、この抹茶サービスだけでも来館の価値がありそうだ。

■湯河原のパワースポット

湯河原町役場の観光課の出しているパンフレットで湯河原のパワースポットを紹介している。

その一番は「五所神社」だ。この神社は歴史が古く、天智天皇の時代に建立され、石橋山の合戦の前夜に頼朝やこの地の豪族の土肥実平らが先勝祈願にこの神社で盛大に護摩を焚いたといわれている。

駐車場に車を停めると、目の前にパワースポットの樹齢850年の楠木が立っている。長く生のあるものから人は力をもらおうとパワースポットと呼び、手で触れたりする。その意味では私たち300オカルテットも十分にパワースポットなのかもしれない。ただ手で触れるのは若くて綺麗な女性に限定してもらいたい。



<五所神社の楠木>

次のパワースポットは「城願寺」だ。土肥実平自ら植えたと言われている柏槇（ビャクシン）の木がある。それが事実ならばこの木は樹齢 800 年を軽く超えていることになり、頼朝や実平らの出陣を見守り、石橋山の合戦に敗れ山中に逃れた頼朝ら七騎が無事に房総半島へ逃れるのを見守った歴史の証人ともいふべき大樹になる。そのためこの柏槇もパワースポットなのだろう。

柏槇の木の傍にはその七騎を祀った七騎堂もある。

そして土肥一族の墓がある。66 基の墓石は宝篋印塔をはじめ五輪塔などの各種そろっている。墓石ファンという人がいればこれを見て感激するだろう。



<土肥一族の墓>

湯河原町の 3 大パワースポットの最後は「幕岩」という岩山で、梅林で有名な幕山公園にある。季節外れなのか広い駐車場は私たちの車一台だけで占有している。

午前中に立ち寄った海岸のものとは別にこの近くの山の中にも頼朝たちが隠れた「しとどの窟」がある。石橋山の合戦に敗れて敗走する頼朝たちには次々に危機が襲ってきたが、それらの危機を乗り切ったことでこの一帯が頼朝開運街道と呼ばれている。まったく物は言いよう、言ったもの勝ちという気さえする。負けて敗走しても後に大成するところまで持ち上げられるのかと思ってしまう。

幕岩は幕を張ったような姿からそう呼ばれているというが、今は木々が生い茂り、その幕の全景はよく見えない。柱状節理で大地のエネルギーが露出している所で力強いパワーがあふれる場所と説明されているが、感動はなかった。もともと期待もしていないので落胆もない。

しかしこの幕岩は最近ではロック・クライミングで有名になっているという。温暖なこの地域の山の南面にあるので冬でも暖かくクライマーたちの冬の定番となっており、晴れた冬の週末は順番待ちになるほどだという。

高樹齢の木からパワーをもらうためには手で触るのだから、駐車場から岩山を眺めているだけではパワーはもらえないのだろう。ここも季節を変えて来る価値がありそうだ。

湯河原から奥湯河原に行く途中に「不動滝」がある。滝は駐車場から歩いてすぐで、滝を臨む場所に茶屋があり、ここでは滝を見ながら足湯に浸かれる。実は滝のすぐ近くで温泉が自噴しているのですんな設備も作ることができる。

湯河原町観光課ではパワースポットとしては紹介していないが、この滝もパワースポットだろう。落差 15m、梅雨時でもあり水量が豊富で、迫力があってマイナスイオンをたっぷり感じることができる。木や岩のパワースポットと違って実態のあるマイナスイオンを含んだ霧のような冷気を浴びる。その冷気は霊気にも感じられる。その理由は滝の左側には身代わり不動尊、右側には出世大黒尊がある。不幸は身代わりになってもらい、自分は出世するという何とも凄い組み合わせだ。やはりここは間違いなくパワースポットだ。



<不動滝>

■ヒルトン小田原リゾート&スパとは

根府川のログハウスの近くに「ヒルトン小田原リゾート&スパ」という高級リゾートホテルがある。今回の高・近・短の旅にはうってつけの施設で、こんな機会でもなければ泊まることもないだろうと予約した。

パンフレットから宿の紹介をすると、全ての客室は相模湾に面しており広大な敷地内には多目的の広場 (1800 m²)、バターゴルフ (天然芝 18 ホール)、テニスコート (屋内 2 面・屋外 4 面)、ゴルフ練習場 (8 打席)、散策路 (3 コース・全長 1.5 km)、10 種類の屋内外プール、スパ、岩盤浴、サウナ (ドライとスチーム)、露天風呂付温泉大浴場、卓球、バドミントン、フィットネスセンター、ボウリング場 (10 レーン)、カラオケ (5 室)、キッズルーム、ゲームコーナー、そしてレストランやバーラウンジも充実しており、地下 1 階・地上 12 階で部屋数 172 室の総合リゾート施設になっている。

とにかく豪華極まりない施設ということはこの紹介文を読んだだけでも十分に理解できるだろう。

ところがこの施設はワケ有りで、最初からヒルトンではない。

話は1980年代に遡る。当時は日米貿易摩擦の時代で、最終的に牛肉・オレンジ交渉が決着し、オレンジは1991年に輸入自由化されることになった。そのため全国的にミカン園の他用途への転換が始まり、小田原の根府川にあったミカン園もその一つで、小田原市が厚生労働省の特殊法人雇用促進事業団（現在は独立行政法人雇用・能力開発機構）に対して誘致活動を行い、雇用保険法に基づく勤労者福祉施設の建設が決定し、1997年に「スパウザ小田原」として完成した。その総工費は445億円だった。

しかし巨大な観光施設を雇用保険で建設したことや地元の他の温泉施設からの反発、赤字運営、箱モノに対する世間の批判などで、数年後に小田原市に売却が提案された。

小田原市は運営委託する企業を年間売り上げに応じて最低でも年間4億円以上の賃貸料の条件で公募し、ヒルトンへの委託が決定した。2004年に小田原市は約8億円で購入して、ヒルトンに貸して「ヒルトン小田原リゾート&スパ」としてオープンした。その約10年後に土地と建物の大半をヒルトンが買い取った。その費用は約9億円とされている。

そして昨年2019年の報道では森トラスト（森ビルから分かれた森ビルオーナーの弟の会社）が65億円でヒルトンから購入した。森トラストはデベロッパーなのでホテル運営はヒルトンが継続して請け負っている。

このいきさつで最も得をしたのはヒルトンで、9億円で買って65億円で売れた。さらに10年間の営業の利益もあり、現在も営業している。次に得をしたのは小田原市だろう。445億円の施設を8億円で買って9億円で売った。その差額は小さいが約10年間も4億円以上の賃貸料が入り、さらに観光客も来たので小田原市内にはそれなりにお金が落ちたに違いない。

そして最も損をしたのは「雇用・能力開発機構」だが、実際には税金や雇用保険料が使われたので、国民や一般企業がツケを払わされた。そしておそらく誰も責任を取っていない。

■ヒルトン小田原リゾート&スパに泊まる

こんな素晴らしい、そして訳ありの施設を利用しない手はない。それで今回の2泊目はこの施設に宿泊することとなった。



<ヒルトン小田原リゾート&スパ 左がフロント、右はロビー>

チェックインをした際のフロントスタッフの対応はさすがにヒルトンという印象だ。粗相がないのは当たり前で、ソフトな人当たりとこのコロナ禍の時期に来館してくれたことへの御礼やそれに伴う苦労話などを織り交ぜた軽い世間話にあたたかい歓迎の意が感じられる。さすがに社員教育のレベルが違う。

さて私たちが泊まる4人用の和洋室に入ると、洗面・トイレとバスルームが独立しているが、どちらもただただ広い。その割には畳とベッドの寝室はさほど広くない。どうもアンバランスな感じがする。ついでに書くと畳はところどころ擦り切れていて高級感は全くない。

大浴場はあるものの、部屋と大浴場との往復はスリッパと浴衣でも構わないが、レストラン利用時にはスリッパと浴衣はご遠慮願いたいということで、リラックスするために来たのにリラックスできない。こちらもチグハグな感じだ。

大浴場の入口の靴ロッカーや、脱いだ服を入れる脱衣場のロッカーは4桁の暗証番号を入力してロックする方法で、部屋にあるセーフティボックスではよく見るタイプだが、ここで一騒動が起きた。ちょっと年配のお客がロッカーの使い方が分からずに暗証番号を覚えないうまろックしてしまった。

すぐにフロントに電話して助けを求めようとしたが、電話器に書かれているフロントの電話番号の文字が小さ過ぎて眼鏡なしでは読めずに苦労している。周囲の人たちの助けもあって、なんとかスタッフを呼んで合鍵で開けてくれた。スタッフの対応は手慣れたもので、いつものことらしい。

このホテルは海外旅行慣れした人や、若者から中年くらいまでの人をターゲットにしており、年配の人には優しくないようだ。



<大浴場入口付近の吹き抜け>

レストランは食べ放題のビュッフェスタイルで、日本ではバイキングと言った方が分かりやすい。しかしこのホテルではbuffetと呼んでおり、私は最初何の事か私には分からなかったが、ビュッフェはフランス語読みで、ヒルトンはあくまで本社のある米国にこだわって英語読みのbuffetなのだろう。

それでもバイキングと言わないのはさすがだ。バイキングはもともと食べ放題の意味ではなく、日本で初めて食べ放題を採用したレストランの店名がバイキングだったので、その方式が店名で広まってしまった。だから海外ではバイキングは全く通用しない。海外では英語で食べ放題を意味する **all you can eat** と表記した看板をよく見かける。

ビュッフェスタイルはコロナ禍では対策がとりにくいだろうと、私が事前に電話した時に聞いたが、その時の電話口では「万全の対策をしておりますのでご安心ください」と言っていた。さぞかし、さすがにヒルトンという対策をしてくれるのだろうかと期待していたが、やはり過度な期待は落胆につながった。

レストラン入口で手を消毒しビニール製の手袋を受け取ってレストランに入る。ビュッフェスタイルなので料理を取りに行くときはマスクと手袋を着用とのことだが、私はビュッフェスタイルのレストランで料理を取る時には一度に大量にとらずに少しずつ食べたいものを取りに行くようにしているので、いちいち手袋とマスクの付け外しはかなり面倒だ。特に手袋は手の汗によって手袋のビニールが皮膚に密着してしまい取るのに苦労する。

しかし料理を見ると全ての料理は小分けにされて皿に乗っていてその上にラップがかかっている。お客が共通のトングや箸で取ることもないのにこの手袋は全く意味を成していない。つまりお客が一度手にした皿を戻さない限り手袋は全く必要ない。そこを徹底すればいいだけなのに、どうもやるのがチグハグな感じばかりする。やはりこのコロナ対策は完全に「期待と落胆」になった。

料理の質や味については、メニューとしてはステーキや鰻もあり及第点ではあるが、味は特段に美味いということもなかった。

ただ悪いことばかりではなく良いこともあった。チェックイン時に滞在中に使えるソフトドリンク無料券をもらっており、レストラン入口でこんなコロナ禍の時期に来たのでこのソフトドリンク券で生ビール一杯にならないかと交渉したら、上司に相談して OK になった。何事も試してみるものだ。

いつものように宿泊客を観察すると、意外にも客層は若い。あまり年配者はおらず、若いカップルやファミリーが大半を占めている。あるいは若者が年配者と一緒に来ているパターンもある。

若年層でもこの高いホテルを利用するとは、日本の国は若年層においても富裕層と貧困層に 2 極化が進んでいると感じることになった。

生ビールは運が良かったのか、よくあるサービスなのか分からないが、それにしてもこの内容で 1 泊 2 食付き一人約 24000 円は高い。そんな気持ちだからチェックアウトで支払う時には昨日のログハウスのような満足感や得した感はなかった。

高・近・短の旅だから仕方ないと自分に言い聞かせたが、何か腑に落ちない。

■かまぼこを作る

旅の 3 日目、最終日は小田原で過ごす。小田原と言えば「鈴廣のかまぼこ」が有名で、鈴廣が経営する「かまぼこの里」の駐車場に車を停める。

ここは正月の箱根駅伝の中継地点でも有名なので、箱根駅伝の“追っ掛け”をやっている鳩原さんを中継地点の標識に案内して記念撮影し、敷地内にある「かまぼこ博物館」に入る。この博物館ではかまぼこ作りの工程の説明やかまぼこの板を使った美術品の展示、食の科学のコーナーなどあるが、今回の私たちの目的は「かまぼこ・竹輪作り体験」だ。

かまぼこ作りの大まかな流れは、①魚の頭、内臓などを取って魚の肉だけを採り出す、②水でさらす、③脱水しミンチにする、④食塩や調味料を加えて練る、⑤すり身を成形、⑥加熱処理、となっている。

この工程を全て体験するには時間も技術も足りないので、⑤の成形作業が体験できる。要はすり身を板に付ける作業と竹輪にするためにすり身を竹の棒に巻き付ける作業だけだ。蒸す・焼くという加熱処理は店の側がやってくれる。

平日の午前中ということやコロナ対策もあって参加者は10人ほどで、若い人が多い。もちろん300オカルテットは群を抜いた存在になっている。

作業は誰でもできるようにスタッフが丁寧に教えてくれる。右手に刃のない包丁を持ち、左手にかまぼこ板を持ってすり身を練りながら板に盛りつける。この作業が意外に難しく、売っているように綺麗な“かまぼこ形”にするのにはほど遠い。次は左手に竹の棒を持ってすり身を棒に付けて竹輪を作る。こちら予想以上に難しい。

それでもこんな風にかまぼこや竹輪ができるのかという良い勉強になった。これは経験しない限りまず分からないだろう。

この手作り体験では最終的に自分が作ったかまぼこがもらえる、いや単なるかまぼこではなく立派な作品だ。人間国宝が作ればこのかまぼこも凄い値段になるのだろうか、あれこれ考えてしまう。

竹輪は15分ほどで焼きあがり、焼きたてをその場で食べることができる。焼きたてだからか、竹輪の味がこんなに香ばしくて美味しいものとは思わなかった。やはりこれは「偶然と感動」だろう。

かまぼこは小さな箱に入れてもらいお土産にしてもらってきた。驚いたのはその小さな箱に小さいながらも保冷剤も入れてくれたことだ。費用1500円だが、決して高いとは思えず満足感が残った。これは老若男女問わずお勧めの体験だろう。



<製作途中のかまぼこ>



<竹輪 焼き上がり>

■小田原を楽しむ

私はゴルフの帰りに干物を買うことがよくあり、その時は小田原の早川地区にある「山安ターンプイク店」という干物屋に立ち寄ることが多い。そして今回もそこに立ち寄った。

干物屋というと天日干しで手作業のイメージがあるが、山安は3カ所の工場で大量生産をしており、一日に20万枚も干物を作っている。もちろん天日干しはしていない。もっとも神奈川県は条例で天日干しを禁止しており、天日干しにこだわるならば隣の静岡県に行くしかない。

さて自社工場で大量生産しているので当然安く売っている。さらにこの店は工場が近いのでキズモノのコーナーなどがありさらに安い掘り出し物が店頭で並んでいる。誰を連れて行っても安い安いと大量に買い込んでしまうのが常だ。

今回も案の定、300オカルテットは大量に買い込んだ。

それにしてもこの買い物風景を見る限り、私たちはどうしても安・近・短から抜け出せないらしい。

今回の旅の最後の昼食は小田原城近くの老舗日本料理店「だるま」で食べる。竹田さんのお勧めの店である。いや正確には店の外観がお勧めということで、写真だけでもなかなか絵になる。

説明書きにはこう書かれている。

明治26年、元網元の初代達磨（たつま）仁三郎が創業し、相模湾で水揚げされる魚介を中心に天ぷらや寿司などの料理が評判になり、今日に至っている。

建物は唐破風入母屋造りの、国の有形登録文化財にも指定されている。



<日本料理店 だるま>

私たちはその有形登録文化財の敷居をまたいだ。

中に入ると席は半分も埋まっていない。

私は上寿司を注文した。すると「お吸い物は付いていませんが、どうしますか？」と聞かれた。私は内心「何、それ・・・」と思ったが、平然とした顔で「では、お吸い物もお願いします」と付け加えた。これには驚いた。吸い物が付いていない。しかも300円もする。まあ、そんなことを気にしては高級店には入れないのだろうが、私は心のどこかで落胆している自分に気が付いた。1500円で体験した鈴廣では持ち帰りに保冷剤まで入れてくれたが、2000円以上する上寿司には吸い物も付いていない。

そしてその上寿司と吸い物が出てきた。寿司のネタは並みレベルで、味にも感激しなかった。

支払いの時、当然のように満足感もお得感もない。昨日食べたマゴ茶漬けが今回の昼食で一番良かったと300オカルテットの誰もが言っていたのが印象的だった。

■高・近・短の旅はできたのか

この昼食もしかり、高・近・短の旅は私のような庶民にはあまり馴染まないのかもしれない。

そんな経験をいくつかして私は高・近・短の“高”を勘違いしていたことに気が付いた。それは高い宿に泊まることや高い料理を食べることが、即満足につながるものだという勘違いだ。いや勘違いというよりも過度の期待だった。ある意味それは私の持論の「期待と落胆」になるのか

もしれない。

高い、あるいは高級なものは価値があり満足するはずという単純な発想だ。しかし高い＝満足には必ずしもならない。それは私のように貧乏旅行に慣れた者にとって陥りやすいことで、この値段だから満足できるはずという思考回路が働くからだ。しかし問題は値段ではなく満足することだ。

高・近・短の“高”は、高い宿や高い料理を目的にしているのではなく、目的はあくまで内容に満足できるかであり、満足できるならば惜しみなくお金を使うということだろう。つまり“高”は価格が高いとか高級とかではなく満足するためには高い金を払ってもよいという意味で、それは本物志向というものかもしれない。

高級レストランでワインを注文した時にテイastingをして、飲む価値があるか判断をするのが、気に食わなければ別のワインを持ってきてもらう、ただしテイastingで開封したワインの代金も払うというのが本物志向の意味するところだろう。金持ちだからできる贅沢だ。私のような貧乏人は飲まないのだから開封したワインの料金を払いたくないと考えてしまう。いや、味に不満があってももったいないから別のワインにせずに妥協して飲んでしまう。そんなことではとても本物志向にはなれない。

そのようなことに馴染めないならば、むしろ“高”を取り除いて、近・短の旅を目指した方が良い。

私たちの今回の旅は実のところ高・近・短ではなく、本物志向になりきれず近・短だったのかもしれない。それでも安・近・短よりも選択肢が広がったために、よりダイナミックな旅になり、ワンランク上の旅になったような気がする。

しかしそんな私でもいつの日か、本当の高・近・短の旅をしてみたいと思った。それはこの旅が私を少し成長させてくれたおかげかもしれない。

■旅の行程

2020年7月12日（日）～7月14日（火）で行った2泊3日の旅の記録を記す。

【1日目】

- ・ 10:30 大磯駅に集合
- ・ 大磯駅前の湘南発祥の地記念碑
- ・ 大磯町郷土記念館、旧吉田茂邸（外観と庭園、七賢堂、銅像）、
- ・ 一夜城跡、ヨロイズカファーム
- ・ 小田原さかなセンター内の「海雅」でマグロ丼の昼食
- ・ 16:00 根府川の「離れのやど 星ヶ山」にチェックイン

【2日目】

- ・ 10:00 宿をチェックアウト
- ・ 石橋山古戦場跡、佐奈田与一義忠討死の地、文三堂、佐奈田霊社
- ・ 岩海水浴場近く源頼朝船出の浜
- ・ 真鶴港の前の鴉窟（しとどのいわや）
- ・ 真鶴半島先端の三ツ石海岸、ケープ真鶴

- ・真鶴港の魚座前の「宵」のマゴ茶漬けで昼食
- ・真鶴港の貴船神社参拝
- ・湯河原の五所神社拝観（樹齢 850 年の楠木）
- ・湯河原の城願寺拝観（土肥一族の墓、七騎堂、樹齢 800 年の柏槇（ビャクシン）の木）
- ・不動滝
- ・人間国宝美術館見学
- ・幕山公園（幕岩）
- ・17:00「ヒルトン小田原スパ&リゾート」チェックイン

【3日目】

- ・9:50 宿をチェックアウト
- ・鈴鹿かまぼこの里、かまぼこ博物館（かまぼこ・竹輪作り体験 50分）
- ・干物の山安で買い物
- ・小田原駅近くの老舗料理店「だるま」の寿司で昼食
- ・14:10 小田原駅にて解散

■旅の費用

一人当たりの費用は約 48500 円、その詳細を以下に記す。

【交通費】（約 2800 円）

- ・走行距離 200km 弱ガソリン代 約 2500 円
- ・大磯城山公園駐車場料金 300 円

【宿泊費】（158708 円）

- ・離れのやど星ヶ山 62470 円（一人当たり 15618 円）
- ・ヒルトン小田原スパ&リゾート 96238 円（一人当たり 24060 円）
- ※上記の内訳 PACKAGE RATE 73400 円（1泊2食の基本部分）
 - リゾート管理費 4400 円（リゾート管理？1000 円/人+税）
 - 消費税・サービス料 17838 円（消費税 10%、サービス料 13%）
 - 入湯税 600 円

【昼食その他】（22674 円）

- ・1日目昼食「海雅」のマグロ丼 5720 円（一人 1430 円）
- ・2日目昼食「宵」のマゴ茶漬け 2000 円（一人 500 円）
- ・3日目昼食「だるま」の上寿司と吸い物 9460 円（一人上寿司 2035 円、吸い物 330 円）
- ・部屋で飲んだ酒代とつまみ 5494 円

【体験・入場料】（9800 円）

- ・人間国宝美術館入場料 3600 円（一人 900 円）
- ・かまぼこ博物館かまぼこ・竹輪作り体験 6200 円（一人 1550 円）